(3) 三島村の昔を見つけよう

① しせきや記ねんひ

三島村には、昔の様子を伝えてくれるものやたてもの（しせき）、村の人びとのためにつくしてくれた人を記ねんするための記ねんひが見られます。

ア　それぞれの島にあるしせき

(ｱ) 聖大明神社（竹島）

島の西がわにあります。中には鏡が５面と仏ぞうが数体あります。入り口にある「かいじし」が神社を守っています。

【聖大名神社】

(ｲ) 安徳天皇のはか（硫黄島）

三島硫黄島学園の東にあります。源氏に負けて硫黄島に来た平家の安徳天皇と天皇とかんけいの深い人のはかがあるといわれています。

【安徳天皇のはか】

(ｳ) 熊野神社（硫黄島）

硫黄島の港のすぐ北にあります。昔、平氏にこの島に流された俊寛たちが、早く帰ることをいのってたてられたといわれています。

【熊野神社】

(ｴ) 六地蔵（竹島）

竹島のあみだ堂あとにあります。高さは、だいたい２ｍあります。ささの中にうまっていたものを 1970 年（昭和 45 年）にほり起こして組み立てました。

【六地蔵】

(オ) 黒尾大名神社（黒島）

大里地区にあります。400 年ぐらい前にたてられました。海での安全を守る神様がまつられています。

【黒尾大名神社】

(カ) イバドンのはか（黒島）

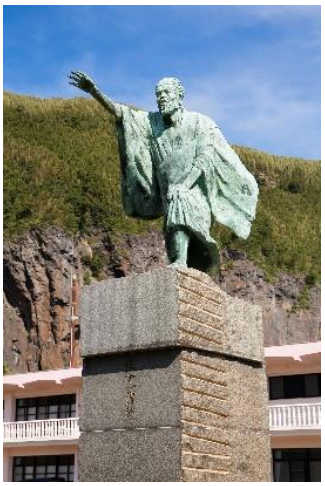
片泊にあります。「イバドン」というのは、かまくらから黒島の平家をたおしにきた源氏のさむらいです。弓の名人で、「大庭どん」とよばれていましたが、いつの間にかイバドンになりました。

【イバドンのはか】

イ　それぞれの島にある記ねんひ

それぞれの島の学校や地域には、学校がたてられたことや道路ができたことなどを記ねんしてたてられた記ねんひがあります。

黒島
【村道開通記ねんひ】



硫黄島
【俊寛像】

竹島
【新ちく落成記ねんひ】

②　行事や祭り

わたしたちの村には、昔から伝わるいろいろな 行事やお祭りがのこっています。お正月の行事、３月の節句、５月の節句、七夕祭り、おぼん（八月踊り）、十五夜のつな引き、そのほか神社のお祭りなどがあります。それぞれ、自分の家で行うお祭りもあれば、地区の人たちがみんなで楽しむ行事もあります。村の人たちは、行事やお祭りを通して、みんなで仲よくくらしてきたのです。

それぞれの地区で行われているものを一つずつ調べてみましょう。

ア　馬方踊り

１月に竹島の聖神社で行われていた踊りです。ほうそう（てんねんとう）よけの踊りで、1794 年（寛政 6 年）に始まりました。神社のけいだいに、このときだけおねがいして来ていただいたお伊勢様をまつり、この前で２日間踊り続けます。家によってそれぞれ決まった席をとり、チグン（べんとう）を食べるなどして、とてもにぎわったということです。見物人を整理するために「だんな」とよばれる男二人が、「東西棒」という大枝をついて、のっしのっしと踊り場を見回ります。

【馬方踊り】

1955 年（昭和 30 年）ころまでは、この２日間、学校も休みにしていたほどだったそうですが、ここ数年は行われていません。大切な伝統の無形民俗文化財です。後けい者の育成を図り、早期のさい開が待たれます。

イ　八朔太鼓踊り

【八朔太鼓踊り】

硫黄島に伝わる踊りです。旧暦の８月１日と２日に行われています。1598 年（慶長３年）さむらい大将の長浜氏らが薩摩のとの様にしたがって豊臣秀吉の朝鮮出兵に参加していました。そして、戦いの中、島津のとの様を助けてほうびをもらったことを祝って硫黄大権現宮に奉納したのがこの踊りです。熊野神社の前で、矢旗を背負い、たいこをむねにつけ、はちまきをした踊り手十数人と、花笠をつけた一人のかね打ち（本当なら二人）がいっしょになって踊ります。そのあと島の中をたいこをたたいてまわります。これは、島のあくま（悪霊）を集めるという意味があり、最後に海にすてていました。

また、踊りのと中に頭に大きな面をかぶり、みのを着たメンドンが出てきます。そして、手に持った木のえだで、島の人たちの体をたたいて回ります。これには、人びとの体の中に入りこんでいる悪いものを追い出そうという気持ちがこめられています。

この硫黄島の八朔太鼓踊りは、国の重要無形民俗文化財に指定されています。

【クセンボ】

このほかに、硫黄島には、旧暦の９月 10 日と 11 日に行われる九月踊り、１月７日のクセンボ、１月 15 日のやくばらい、８月 15 日の夜に行われる柱松などがあります。

ウ　面踊り

【大里の面踊り】

この踊りは、大里に伝わる八月踊りの一つです。踊り子十数人が、思い思いのぼろの服を着て、こしにはひょうたんをぶらさげています。顔には、オニ、オカメ、ヒョットコ、カッパなどの、こわいような、おかしいような面をつけます。手には、すりこぎとしゃもじを持っています。 そして、「ヒョウ、ヒョウ」と、きみょうな声をあげながら、「ことしゃの分、来年まちゃれな、道のこぐさに米がなるな、アずいな、アずいな」などと、歌に合わせて、おもしろく、おかしく踊ります。

これは、子どもやまごたちが、ますます栄えますように、また、田や畑の作物が、たくさんとれますようにと、いのるお祭りの踊りです。この踊りは、面や踊りのしぐさなどに、なんとなく遠い南の国の踊りのような、ふしぎな感じを受けます。三島大里学園の子どもたちも、この「面踊り」をたやさないようにと、毎年練習をして、運動会のときに発表をしています。

エ　盆踊り

片泊の踊りは、お盆に祖先のたましいをなぐさめるために行われます。種類も多く、太鼓踊り、笠踊り、供養踊りなどがありますが、中心になっているのは太鼓踊りです。

はじめに男の人たちが、集落内の拝所の前で花笠をもって踊ります。こ

れを「ババナラシ」といいますが、これをすませないと太鼓踊りはできないことになっています。太鼓踊りでは、カネ・中ダイコ・ ジュウテ・ヘヤという役があり、役によって、女の人のかっこうをしたり、太鼓を持ったりします。踊り歌を歌いながら踊りますが、ならびかたも、たてになったり、まるくなったりします。

【盆踊り】

　供養踊りは、ヘヤ役（男役）をする人たちが、手ぬぐいではちまきをして踊ります。昔は公民館があったところで踊っていました。今は学校の運動場で初盆の家の家族や親類縁者がゴザをしいてすわっている前で踊っています。地区の人びとは、この大切な盆踊りをいつまでものこしていけるように、盆踊り保存会を作って努力しているのです。

オ　特攻平和祈念祭

　1945年（昭和20年）まで、日本は外国と戦争をしていました。いよいよ日本が負けそうになると爆弾を積んだ飛行機（特攻機）といっしょにてきの船につっこむ作戦がとられるようになりました。1945年5月11日、鹿児島から沖縄に向

【特攻平和記念祭】

けて飛び立った１機の特攻機が、開聞岳をすぎたころエンジンの調子が悪くなり、黒島沖に不時着しました。乗っていた３人の特攻隊員は、夢中で泳ぎ、黒島にたどり着きました。島の人たちに、食事の世話やきずの手当などをしてもらうかわりに、島の見回りをし、てきの飛行機が飛んできたときには、ひなんをよびかけました。82 日間黒島ですごし、島を出発する前日、島の人たちは「はなむけの宴」を開きました。

戦争が終わっても、助かった特攻隊員の人たちは命を助けてくれた黒島の人たちをわすれませんでした。黒島を何度もたずね、2004 年（平成 16 年）には「特攻平和観音像」を建てました。この観音像は、自分たちの生まれ育ったところに帰ることのできなかった仲間を思って、開聞岳の方向（北の方向）を向いて建てられました。また、毎年５月に特攻隊員のいぞくや島の人たちなどが参加し、黒島の平和記念公園で「特攻平和祈念祭」を行い、海の中にねむっている多くの戦友のたましいをなぐさめ、平和をいのっています。

【特攻平和観音像】

カ　黒島流れと三島村

今からおよそ 120 年前の 1895 年(明治 28 年) 7 月 24 日のことでした。近くを通った台風は、黒島の近くでかつおをとっていた何せきもの漁船をそうなんさせ、たくさんの人々の命をうばいました。411 人が亡くなった

大変な事故だったのです。

そのころのかつお漁船ははん船で、台風の進み方を知るための機械もなく、近づいていることに気づいたときにはひなんするひまがなく、そうなんをかくごしなければならなかったといいます。

この事故でそうなんした人のほとんどは、片泊の塩手鼻・ユキノ瀬あたりに打ちよせられました。黒島の人びとはけがをした人、息たえだえの人をそれぞれ背負って高いがけをよじ登り、ようやく家につれて帰り、枕崎から助けの船が来るまで、食事の世話をしたり、けがの手当てをしたりしました。村の人たちは、わずかにたくわえていた養生米（重病人が出たり、災害にあったりなど、非常時のためにたくわえている米）を家々から持ってきて食事にあてたのです。また、亡くなった人たちを丁重にとむらいました。この悲しい出来事を「黒島流れ」といいます。

【白衣観音像】

このときから、黒島の人々と枕崎の人々との交流が深くなり、黒島の人々が枕崎へ行くと、ていねいにもてなしてくださり、つながりを深めたといいます。また、平成２年には、枕崎の人たちによって、「黒島流れ」でなくなった人たちのために塩手鼻に白衣観音像が建てられました。

今でも、「枕崎市少年の船」で枕崎の小中学生が毎年黒島をおとずれ、交流を続けています。